

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2012～2014

課題番号：24242002

研究課題名(和文) グローバル化時代における現代思想 概念マップの再構築

研究課題名(英文) Contemporary Philosophy in the Age of Globalization

## 研究代表者

中島 隆博 (NAKAJIMA, Takahiro)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：20237267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 27,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は(1)現代思想のマッピング(4)新しい普遍の創出に至る4つのステージに沿って着実に実施された。そのなかでICCT(東京大学、華東師範大学、北京大学、ニューヨーク大学を中心とする国際コンソーシアム)などの国際的協力関係が構築され、新しい普遍をめぐる最新議論の国際発信基地となった。最終年度の大規模国際シンポジウム「“現場”の挑戦と文学の営み」と「“新しい普遍性”をめぐる東アジア三方対話」では東アジアから発信する新しい普遍すなわち地上的普遍性の可能性が議論され、今後の議論の発展に繋がるものとなった。その成果はブックレット『グローバル化時代の現代思想』Vol.1～5として発表した。

研究成果の概要(英文)：In this project, we have developed a process consists of four steps from (1)map contemporary thoughts to (4) proposes a “new universality”. In this process we organized many research meetings, seminars and lectures, especially the International Consortium for Critical Theory with East China Normal University, Peking University, and New York University and two international symposiums at final year. These made it possible to interaction of ideas on the possibility of the “new universality” especially an “earthy universality” from East Asia among the scholars of contemporary philosophy. The results of this project are published in the CPAG booklet series (5 Vols.).

研究分野：東アジア思想

キーワード：国際研究者交流 国際情報交換 思想史 現代思想

### 1. 研究開始当初の背景

本研究のターゲットは 20 世紀とりわけ第二次大戦後の現代思想である。ポストモダンの思想や構造主義、ポスト構造主義、ジェンダー論、批評理論、ポストコロニアリズムなど、現代思想の内実は多様であり、統一的なテーマも方法論も設定されていない。むしろ、その多様な展開こそが現代思想の特徴であるとも言えよう。その一方で、現代思想の多様さを大局的な視座から総合し、思想史に位置づける作業はこれまで実施されてこなかった。たとえあったとしてもそれは入門書のレベルを越えていない。すなわち、多様に展開している現代思想を過去の人類の遺産として確定させ、その成果をこれから始まる新しい時代の糧として供給することは、現代の思想史に課せられたテーマなのである。こうした現代思想の多様性の一方で、現代思想が依拠している概念枠には一貫して西洋的なバイアスがかかっていることも否めない。それもまた現代思想の特異な性格である。だからこそ、本研究が東アジアという地政学的条件において実施されるということが学術的・国際的に意義を持つ。日本・中国・韓国における「近代的なもの」あるいは「西洋的なもの」の受容を根底から検討し、西洋思想の概念枠と東洋思想の概念枠を横断的に検討することで、グローバル化時代に対応しうる規範を一まさしく「東アジア」を発信源として一打ち立てる、それを為すこともまた現代の思想史に課せられたテーマに他ならない。

### 2. 研究の目的

第二次大戦後の思想は「現代思想」という抽象的な語でしか括れないほど多様である。故

に俯瞰的な概念マップを作成する包括的研究が現代思想に欠如している。本研究の目的はそれを補い、多様に展開している現代思想を過去の人類の遺産として確定させ、成果を後の時代の糧として供給することである。現代思想が依拠してきた概念枠には西洋的なバイアスが掛っていることを踏まえ、西洋的概念を東洋的概念と突き合わせることで、また東洋的概念同士、つまり日本・韓国・中国の概念を相互に突き合わせることで概念マップを塗り替える。その作業を経て、グローバル化時代を生きる人間とそれを取り巻く社会の規範となる人間モデルや社会モデルを「新しい普遍」として提示する。

### 3. 研究の方法

現代思想を再構築して全体像を「新しい普遍」として提示するため、本研究は(1)「現代思想のマッピング(現代思想のカテゴリー化)⇒(2)カテゴリー毎の分析⇒(3)カテゴリー横断的比較思想分析⇒(4)新しい普遍の創出(将来の人間モデルと社会モデルの提示)」というステージを設定し、このサイクルを1セットとしてフィードバックを加えながら2セット以上実施する。本研究の方法は多数の海外連携機関と構築する国際共同研究体制のもとでの研究者間の対話を軸とする。合意をベースにしたボトムアップ的なアプローチを現代思想の分野に適用する。具体的には、研究者によるリサーチ・ミーティングの実施が本研究の柱となる。

### 4. 研究成果

本研究は(1)現代思想のマッピング⇒(4)

新しい普遍の創出に至る4つのステージに沿って着実に実施された。その成果として特筆すべきは、ICCT (International Center for Critical Theory: 東京大学、華東師範大学、北京大学、ニューヨーク大学を中心とする国際コンソーシアム)をはじめとする国際的協力関係の構築において、中心的な役割を果たしたことである。その象徴的なイベントとして、最終年度6月27日と28日の二日間にわたり、日中文学界を先導する三人の作家を招き、ICCTに参加する世界各地の機関から二十名を超える研究者が一同に会する大型国際シンポジウム「“現場”の挑戦と文学の営み」を主催したことが挙げられる。この場を通して、新しい普遍をめぐる最新議論の国際的共有がはかられた。さらに華東師範大学、延世大学、東京大学の研究者が集ったラップアップシンポジウム「“新しい普遍性”をめぐる東アジア三方対話」では、「新天下主義」(許紀霖氏)をはじめとする新しいアイデアの可能性について濃密な議論が交わされた。いずれにおいても、東アジアから発信する新しい普遍すなわち地上的普遍性の可能性が議論され、今後の議論の発展に繋がるものとなった。以上の成果については、CPAGブックレット『グローバル化時代の現代思想』Vol.1~5を刊行し、英語ないし日本語で発信している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 28 件)

- ① 中島隆博、儒教と民主主義——トーマス・フレイリッヒとハイナー・レッツ論文をめぐって、中国——社会と文化、29、査読無、2014、pp. 212-218.
- ② 中島隆博、近代東亜哲学話語中被附加了條

件的普遍性与世界史、澳門理工学报、17-3、査読有、2014、pp. 193-197.

- ③ 中島隆博、儒教、近代、市民的スピリチュアリティ、現代思想、42-4、査読無、2014、pp. 62-73.

- ④ 原和之、サドの読者ラカン、ユリイカ、46-12、査読無、2014、pp. 83-113.

- ⑤ 清水晶子、攪乱の暴力と向き合う、ジェンダー研究、17、査読無、2014、pp. 57-67.

- ⑥ Tsuyoshi Ishii, The Scientific Spirit and the Transformation of Li (Principle): The Debate about the Assessment of Ch'ing Scholarship in the Early Republican Period, Transactions of the International Conference of Eastern Studies, 58, 査読無, 2014, pp. 42-58.

- ⑦ 石井剛、「同ぜず」のために：たたかう孔子と「文」の共同態、現代思想、42-4、査読無、2014、pp.74-85.

- ⑧ NAKAJIMA Takahiro, “Modern Philosophy in Conflict: Science and Religion in China and Japan”, Contemporary Philosophy in the Age of Globalization, 3, 査読無, 2014, pp. 49-65.

- ⑨ 中島隆博、科学と宗教あるいは道徳——徐復観と西谷啓治における人格概念の再検討、グローバル化時代における現代思想、1、査読無、2014、pp. 161-174.

- ⑩ 中島隆博、中国における「哲学の起源」——抑圧された胡適の老子起源説、a t プラス、15、査読無、2013、pp. 28-36.

- ⑪ 石原孝二、経験しえないものの疫学、哲学雑誌、128 (800)、査読無、2013、pp. 128-148.

- ⑫ 齋藤希史、近代日本のアジア主義と漢文——岡本監輔の場合——、中国——社会と文化、28、査読有、2013、pp. 11-27.

- ⑬ 中島隆博、ヒーローなしで今日の悪に対抗するには、ユリイカ、2012-8、査読無、2012、pp. 86-93.

- ⑭ 梶谷真司、死を語る理由の必然性と歴史性、超域文化科学紀要、17、査読無、2012、pp. 41-63.

⑮村松真理子、「天使のような貴婦人」の系譜、西洋中世研究、4、査読無、2012、98-124.

⑯林永強、西田幾多郎与牟宗三：跨文化倫理學說的可能性、台湾東亞文明研究學刊、9-2、査読有、2012年、pp. 73-100.

〔学会発表〕（計 106 件）

①石井剛、方言的思想：如何評估章太炎和劉師培的方言研究？、明清以来的地方意識与国家認同学術研討会、2015年3月29日、華東師範大学、上海（中国）。

②Tsuyoshi Ishii, Toward New Humanities: Trials for Coexistential Praxis and Alternative Possibility of “Civil Society”, Workshop on “Between Humanities and Civil Society”, 2015年3月13日、香港中文大学、香港（中国）。

③林永強、アカデミック・ディシプリンとしての日本哲学—その可能性と問題性、グローバル人文学の可能性と課題、2014年12月6日、日本學術會議（東京、港区）。

④Kazuyuki Hara, Analyse et langage : La 'lettre' selon Lacan lecteur de Poe et de Joyce, 7e Congrès de la Société Internationale de Psychanalyse et Philosophie(SIPP/ISPP), 2014.12.5, Seidlvilla, Munchen (Germany).

⑤Takahiro Nakajima, Japanese Nationalism in the Age of Globalization: Towards an Earthy Universality, International Conference “Reimaging Nation and Nationalism in Multicultural East Asia”, 2014.11.24, City University, Hong Kong (China) .

⑥石井剛、“文”—在“和而不同”中面对“他者”的芸術：回應賀照田《当中国開始深入世界……：南迪与中国歷史的關鍵時刻》、CPAG ラップアップシンポジウム「“新しい普遍性”をめぐる東アジア三方対話」、2014年11月14日、東京大学駒場キャンパス（東京、目黒区）。

⑦Takahiro Nakajima, Confucianism and Modernity in Japan: Fukuzawa Yukichi and Nakae Chōmin, International Conference

“Optimism and Scepticism regarding Progress in Late 19th-Century and Republican China II”, 2014.10.23, IKGf, Erlangen University, Erlangen (Germany).

⑧梶谷真司、対話としての哲学の射程——グローバル時代の哲学プラクティス、高千穂大学連続講義「危機の時代と哲学の未来」、2014年10月14日、高千穂大学（東京、杉並区）。

⑨Takahiro Nakajima, The Formation and Limitations of Modern Japanese Confucianism: Confucianism for the Nation and Confucianism for the People, International Conference “Confucian Values in a Changing World Cultural Order”, 2014.10.10, Hawaii University, Manoa, Hawaii (America).

⑩中島隆博、近代東亞中的国家与宗教、台湾大学／科技部講演、2014年9月19日、台湾大学、台北（台湾）。

⑪中島隆博、近代日本思想：竹内好与丸山眞男、台湾交通大学／科技部講演、2014年9月18日、台湾交通大学、新竹（台湾）。

⑫梶谷真司、共に問い、共に考える～対話としての哲学、スルガ銀行 d-labo、2014年9月9日、ミッドタウン・タワー7F（東京、港区）。

⑬Akiko Shimizu, Touch Me Not: Keeping A Queer Distance in Postcolonial Japan, 2014.7.3, University of Tampere , Tampere (Finland).

⑭中島隆博、グローバル市民社会とローカルな精神性、CPAG/ICCT 国際シンポジウム「“現場”の挑戦と文学の営み」、2014年6月27日、東京大学駒場キャンパス（東京、目黒区）、招待講演。

⑮石井剛、孔子の「文」と武田泰淳の歴史：「書く」ことでリヴァイアサンは逃れられるか、CPAG/ICCT 国際シンポジウム「“現場”の挑戦と文学の営み」、2014年6月27日、東京大学駒場キャンパス（東京、目黒区）。

⑯NAKAJIMA Takahiro, De Anima in East Asia, Faculty of Philosophy in Sofia University, 2014.6.21, Sofia University, Sofia (Bulgaria).

⑰ NAKAJIMA Takahiro, Philosophical Network of Co-existence in Asian Thought: Challenges of UTCP and CPAG, CPAG+UTCP Symposium “Co-existence in Asia,” , 2014.2.3, University of Yangon, Yangon (Myanmar).

⑱ 石井剛、批評的史学、史学的批評：日本現代史学理論的自我反思、“日本東洋史研究的回顧与反思——以增淵龍夫的研究与思考為中心——”研討会、2013年11月30日、中国人民大学、北京（中国）。

⑲ 梶谷真司、全体論的人間觀の多義性——近代医学と伝統医学の比較から、哲学会第52回研究発表大会、2013年10月26日、東京大学駒場キャンパス（東京、目黒区）。

⑳ 梶谷真司、生と死の歴史哲学——近代化によって得たものと失われたもの、JENESYS2.0 中国大学生訪日団外務省訪問セミナー、2013年9月24日、外務省中央庁舎（東京、千代田区）。

㉑ Tsuyoshi Ishii, Dai Zhen’s Solitude and Hu Shi’s Design for Chinese New Philosophy: On Their Struggle against Confucian Traditional Ethics, International Conference “After New Confucianism: Whither Modern Chinese Philosophy?”, 2013.9.6, Australian National University, Cambella (Australia).

㉒ Kazuyuki Hara, International Conference "Affect, Politics, Psychoanalysis". "Figures of Closure: Affect and its Articulation in Psychoanalysis", 2013.6.21-23, National Taiwan University, Taipei (Taiwan).

㉓ 梶谷真司、対話としての哲学の射程——グローバル時代の哲学プラクティス、東京大学・延世大学共同シンポジウム「共生と公共性——現場からの問い」、2013年6月13日、延世大学、ソウル（韓国）。

㉔ 梶谷真司、「命」の歴史哲学——江戸の医療・育児・養生を手がかりに、高校生のための金曜特別講座、2013年4月26日、東京大学駒場キャンパス（東京、目黒区）。

㉕ 齋藤希史、雅言の空間——漢字圏における文字と言語——、「東アジア古典学の可能性と難関Ⅱ」国際学術会議、2013年4月26日、成均館大学、ソウル（韓国）。

㉖ 石井剛、章炳麟と高山樗牛の国家論：明治後期日本における思想連鎖を問う、International Conference “Contemporary Philosophy in The Age of Globalization”、2013年1月18日、香港中文大学、香港（中国）。

㉗ Mariko Muramatsu, D’Annunzio in Giappone, CONVEGNO INTERNAZIONALE DI STUDI “D’ANNUNZIO 150”, 2013.3.13, Pescara (Italy),.

㉘ 石井剛、超越国家的国家想像：章太炎と高山樗牛、中華民族的国族形成与認同学術研討会、2013年3月9日、華東師範大学、上海（中国）。

㉙ Kohji Ishihara, From the Uncanny Valley to Developmental Robotics: Toward a Philosophy of Japanese Humanoid Robotics, International Conference “Contemporary Philosophy in the Age of Globalization”, 2013.2.8-10, University of Hawaii at Manoa, Hawaii (America).

㉚ Mariko Muramatsu, Lingua e territori. Esperienze a confronto: Italia e Giappone, 第12回世界イタリア語週間、2012.11.11, イタリア文化会館（東京、千代田区）。  
〔図書〕（計34件）

① NAKAJIMA Takahiro, Can a Presumed Consent Stop Organ Trafficking?, Akira Akabayashi (ed.), The Future of Bioethics: International Dialogues, Oxford University Press, 2014, pp.816 (421-425).

② 中島隆博、教養としての中国——規範の鑑と蔑視の対象の間で、苺部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編『内と外——対外観と自己像の形成』、2014年、pp. 284 (123-150).

③ 齋藤希史、漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か、新潮社、2014、pp. 223.

④ 齋藤希史、漢文脈と近代日本、KADOKAWA、

2014、pp. 252.

⑤石井剛、戴震と中国近代哲学、知泉書院、2014、pp. 417.

⑥NAKAJIMA Takahiro, Viren Murthy and Axel Schneider (eds.), An Eschatological View of History: Yoshimi Takeuchi in the 1960s, The Challenge of Linear Time: Nationhood and the Politics of History in East Asia, Brill, 2013, pp. 301 (135-154).

⑦中島隆博、内藤湖南の史学: 如何摆脱对“統”的追求,復旦大学文史研究院編『民族認同与歴史意識: 審視近現代日本与中国的歴史学与現代性』、中華書局、2013、pp. 320 (43-51).

⑧中島隆博、科学と宗教——中国と日本における近代哲学の葛藤、堀池信夫・井川義次・石川文康編『知は東から——西洋近代哲学とアジア』、明治書院、2013、pp. 214 (189-214).

⑨齋藤希史、漢詩の扉、角川学芸出版、2013、pp. 200.

⑩村松真理子、謎と暗号で解くダンテ『神曲』、2013、角川書店、pp. 251.

⑪小林康夫、こころのアポリア、羽鳥社、2013、pp. 417.

⑫林永強、東亜視野下的日本哲学、2013、台大出版社、pp. 224.

⑬中島隆博、悪の哲学——中国哲学の想像力、筑摩書房、2012、pp. 211.

⑭小林康夫、存在のカタストロフィー、未来社、2012、pp. 358.

⑮林永強、張政遠編著、日本哲学の多様性——21世紀の新たな対話をめざして、世界思想社、2012、pp. 254 (194-206).

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

「グローバル化時代における現代思想——概念マップの再構築」

<http://cpag.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島隆博 (NAKAJIMA, Takahiro)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号 : 20237267

(2) 研究分担者

原和之 (HARA, Kazuyuki)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 00293118

(3) 研究分担者

石原孝二 (ISHIHARA, Kohji)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 30291991

(4) 研究分担者

清水晶子 (SHIMIZU, Akiko)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 40361589

(5) 研究分担者

石井剛 (ISHII, Tsuyoshi)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 40409529

(6) 研究分担者

梶谷真司 (KAJITANI, Shinji)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 50365920

(7) 研究分担者

小林康夫 (KOBAYASHI, Yasuo)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号 : 60153623

(8) 研究分担者

齋藤希史 (SAITO, Mareshi)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号 : 80235077

(9) 研究分担者

村松真理子 (MURAMATSU, Mariko)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号 : 80262062

(10) 研究分担者

ラム ウィンカン (林永強)

(LAM, Wing Keung)

東京大学・総合文化研究科・特任准教授

研究者番号 : 90636573